

部落問題文芸作品選集

第35卷

春風樓主人著 藤 浪 (前編)

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第三五卷

定価は箱帯に表示

昭和五十一年十一月二十五日発行

発行者

松本富夫

発行所

株式会社
世界文庫

東京都目黒区洗足二一二―一五

電話〇三(七一六)六一五一(代表)
(七一三)九二四四

振替 東京 四―七八四九八番

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

小家
説庭
藤

浪

春風樓主人

(一)

其年、十月中旬の午後四時頃であつた下り明石行列車が、江州米原に着いた頃北陸線から此列車に乗り替へた三人連の二等客があつた。

一人は日柳涉と云つて、金澤中學の教諭で、歳の頃は二十七八一人は細君の苗子、二十歳ばかりの美人であつた、今一人は、永

年、此夫婦に使はれた年増の女中で、住江と云ふ三歳位の女の子を抱いて居る、住江が、苗子の子であることは、誰の目にも直ぐ分る程酷く似て居た。

涉は、赤帽から、革の大鞆ど、赤草の手提とを受け取ると、膝掛を長く敷いて苗子や女中を掛けさせた。

汽車は間もなく動き出した。

『最う直だよ、疲れたらう？』

涉は、旅行案内を膝に伏せて、隣の苗子を振り向いた、苗子は頭を掉つて、

『い、ね、些ども、……京都は是れから幾つ目ですか』

『さうさね』

涉は、再び旅行案内を取り上げて、

「次が彦根、八幡、草津に馬場、それから、山科、稻荷、京都だから、一イ、二ウ三イ……、七ッ目だ」

「竹は幾ッ目で降りるのですか」

「馬場で乗り替わるんだから、四ッ目さ」

「ぢやア、最う、直ですわね」

苗子は左側の女中を見回つて、

「お前はこれから四ッ目よ、名残惜しいわ」

お竹は頷いて、

「逢ふものは好いものでございますけれど、別れるといふものは

何だか嫌なものでございますね」

云つて、最う、涙を噤つて居た。

苗子も、しんみりした鬨子で、

「お前が勤めて呉れたのも、随分長い間だつたわね」

「長い間御厄介になりました、奥さまや旦那様の御恩は、決して忘れは致しません……」

云ふ間に、袖口で目を壓へた。渉は二人の方を向いて、

「また、二人で泣くのかい、竹も、當分は大津の伯母さんの宅に居るといふからちよく京都へ遊びに来るさ、苗も、知らない土地へ歸るのだから、話相手がなくて淋しからうと思ふ」

お竹は涙を拭いて、

「屹度寄せて戴きます、伯母の宅に居りましても、何うせ半歳や一年は遊ぶ意でございますから、奥さま、屹度、お邪魔に上りますよ」

「あ、屹度來てお呉れ、住江だつて、何んなに淋しく思ふか知

れない」

住江は、母親に頭を撫でられて、黙つて大人しく座つて居た。

「ね、良人」ど、苗子は渉の方を向いて、

「竹を連れて歸るんだと、何様に便利だか知れませんがね」

わ

「然し、此方の都合ばかり云つちや居られん」

渉は沈んだ調子で云つたが、暫時して、

「郷里へ歸つたつて、何うせ永くはしないだらう、其間には、

また金澤へ出かけるか、東京で家を持つか、方法を立てるつもり

で居るから、其時は伯母さんの處へ迎ひに行くよ」

お竹は嬉しさに、

「これが親御様のお傍へお歸り遊ばすんで無けりや、厭と被仰つ

でも、お伴を爲せて戴くんですけれど……、こんな残念な事はご
さいません」

「何うせ、また、お前の厄介になるだらう」後は獨語のやうに、

「金澤の家庭は平和だつたね」

「親御さまが、手を受けてお待ち遊ばして被居いますのですもの
今度お歸り遊ばしたら、もう、何處へも、お出し遊ばすこと
ぢやございませんまい」

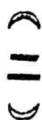
「さうでもないよ、親父は歡ぶか知れないけれど……」と涉は云
ひさして吐息した。

「繼母さんも難しいでせうね」

苗子が堪ねぬやうに問ひかけた時、汽車はプラツトホームに停
まつた。

「彦根、彦根！」

驛員の高い聲がした。



「俺達も馬場で下車やうか」

列車が彦根を發した頃、涉は怎う云つて窓の外を眺めた。苗子は眉を顰めて。

「下車て何うなさるの？」

「平和な家庭の名残を惜むのさ」

「そんな事を……、それよりか、早く歸つた方が好ござんすわ、電報が打つてあるんですから、蛇度誰方かお迎かねに被居るでせ

う

「渉は苗子を見て、

「お前は、爾なに郷里へ歸りたいかい？」

苗子は、寧ろ良人の質問を訝るやうに、

「何故？、だつて、一生、送らなければならない家ぢやありませんか、早く歸つてお父さまやお母さまのお目に掛りたいわ、ねね

お竹」

「それは、さうでございしますとも、何うせ、奥さまが、お二方の死水を取つてお與げ遊ばさなきやならないのでございしますもの」

「それに、住江だつて」と、苗子は住江の方を瞥と見て、

「早く祖父さんや、祖母さんに抱かれたく思ふでせう」

「渉は他を向いて、

「お前は、何にも知らないのだ」

苗子は、不安らしう聞き咎めて、

「知つてゐるわ、お母さまの異つてらッしやることも、芳子さんの被居ることも」

「まだあるよ」

「桂子さんの事？」

上目使ひに、苗子は涉の眼許を見上げながら、手巾を口に當て微笑んだ。

「莫迦な！」

涉は微笑で笑ひつゝ叱つた。洋服の膝の上へ住江を抱き取つて

「住江、お前は大變大人しい、何か、好い御褒美を與げやうね」

住江は嫣然しながら、黙つて頷いた。

「お菓子^{くらし}が宜^{よろ}しうございますか、お林檎^{りんご}に致^{いた}しませうか」

お竹^{たけ}は、信玄袋^{しんげんぶくろ}の口^{くち}を開^あけて訊^きいた。

「お菓子^{くらし}が好^いいね」

涉^{わた}は、竹^{たけ}から菓子袋^{くらしぶくろ}を取^とつて、其儘^{まま}住江^{すまね}の手^てに握^{にぎ}らせた。

會話^{はなし}は少時^{しばらく}途絶^{とだ}えて、汽車^{きしや}は鐵橋^{てつけう}を渡^{わた}りかけた。

「住江^{すまね}、お前^{まえ}は祖父^{おぢい}ちやんが見^みたいかい」

父親^{ておや}に訊^きかれて、住江^{すまね}は口^{くち}をもいへさせ、

「祖父^{おぢい}ちやん、見^みたいの」

「お父^{おとう}さんや、阿母^{おかあ}ちやんがあるから、祖父^{おぢい}ちやんは要^いらないだ

らう？」

住江^{すまね}は首^{くび}を掉^ふつて、

「お父^{おとう}ちやんど、阿母^{おかあ}ちやんと、それから祖父^{おぢい}さんど……」云^いひ

つゝ、片手に指を折つて、

「三つ、要るの」

「慾張つてゐるね」

涉は口許だけ笑つた。

お竹は感心して、

「肉身の御縁ほど不思議なものはございませぬね」

住江は、袋の口を堅く握つて、

「祖父ちゃんは病氣が悪いの、妾、お見舞に行くのよ」

乗合せた客といふ客が、皆住江の方へ目を注いだ、そして、恣んな言を囁く者もあつた。

「まあ、お可愛らしい嬢ちゃんですと」

「色のお白い綺麗な方、宛然、人形さんのやうだ、ああ笑つて被

居る、あのお口許のお可愛らしいと。阿母さん生寫よ』

『お前たちも、彼んな子を生まなけや、女の手柄とは云ないわ』
 『それは無理よ、まづ、お父さんの顔から焼き直して來なけれや
 ねわ』

『ほ、ほ、ほ、』

日没ちかい秋の日は、琵琶湖の水に映わて、窓の硝子にきらき
 らと光つた、汽車は西へ西へと走る。

(三)

京都七條ステーションの一二等待合室に二時間餘も待ち呆けて
 居る三人の女がある。四十近い圓鬘が渉の繼母の邦子で思ひ切り

廂を出したハイカラな令嬢が姪の桂子、桃割に白丈長を掛けた十六七の女が、邦子の連子の芳子であつた。

『歸らうぢやないか、阿母さん、電報には六時三十二分京都着としてあつたのに最う八時二十分よ、迎も今日ぢやないわ欺いたんだわ』

時計を見て來た芳子は、恚う云つて邦子の側に立つた、邦子はいがらんとしたブラットホームの方を見てから、

『歸省ならさつさと歸つて來れば好いのに、人の親切を無にして何を愚圖々々してるんだらう』

『私の云ふ通りよ、伯母さん』

桂子は長椅子に腰を落して、兩手を卓子に投げ出すやうに置きながら、

「此次の九時四分着よ、金澤を午前十一時幾分かの發で、京都へ直行なんですもの、六時着の分では、米原で乗替しなけりやならない、妻子を連れた人に、乗替は憶切よ」

「それなら其れで」と邦子は椅子に掛つて「六時着なんぞど、電報を打たなけれや好いのに」

「さうねね、兄さんは私達を」と芳子は邦子に並んで掛けながら「調弄て居るんぢやないか知ら」

「豈夫」

桂子は笑つて「九時四分まで待つて見ませう、それで無きや今夜は駄目よ」

芳子は指を折つて

「今が八時二十分だから、三十分、四十分……まだ四十分間もあ